

第73話 (59頁) トンボとアリ

秋にアリのところで小麦がしけっぼくなったので、日に干していました。おなかをすかせたトンボが、アリに、食べものをたのみました。アリたちはこう言いました。「どうして夏に食べものを集めなかったんだい。」

トンボは言いました。「そのひまがなかったのです。歌をうたっていたものだから。」アリたちは笑って言いました。「夏は遊んでいたのなら、冬はおどっていたらいい。」

「冬の飢えをしのごうと、せっせと食べ物を蓄えてきたアリたちに対し、トンボは歌ったり遊んだりして冬の準備をしてこなかった。やがて、冬が近づく……。話も教訓も、実にはつきりしているよ。」

「もともとはイソップ物語の『セミとアリ』が元祖らしい。イソップでは『アリとセンチコガネ』の題でも登場するし、あとになると、ギリギリスやコオロギとなっている国もあって、怠け者の虫の名前はいろいろと違っている。ロシアもそうだけど、ヨーロッパの地域によってはセミがいないので、ほかの虫に置き換えられたといわれている。」

「働き者のアリが主人公なのは、どの話も変わらない。日本でもよく知られているお話で、中でも『アリとギリギリス』が知名度では一番だろうね。」

「アーズブカに戻ると、トンボは単数で、アリは複数形。『アリたち』と文中でも表現されているように、アリはもともと群れを作っているし、1匹での食べ物集めは考えられない。」

「ロシアのような寒い国では、冬への備えが一段と必要とされているのではないか。」

「だとしても、ひもじい思いのトンボに向かって『笑って言いました』とあるのが、とても気になる。原文のロシア語でも、嘲笑するという意味の単語が使われている。」

「これじゃ、トンボは餓死するしかなく、残酷な気がするよ。」

「トルストイの独創ではなく、イソップのときから、アリが食べ物を分け与えることを拒否する突き放し型のストーリーが定番らしい。」

「話はそれるけれど、ロシアのショスタコーヴィチが1922年に『こおろぎとあり〜クリイローフの二つの寓話』という題で歌曲を作っている。ここでも『私を見殺しにしないで！食べ物を下さい、暖めてください』とアリは懇願するのに聞き入れられなかった。」

「知名度抜群の『アリとギリギリス』でいうと、こういう突き放し型の展開ではあまりに無慈悲すぎると、アリがギリギリスの窮状を見かねて食べ物を分けてあげる、というような改変が古くから行われてきたそうさ。」

「そういわれてみると、ギリギリスは心を入れ替えてかいがいしく働くようになる、という話も読んだことがあったなあ。」

「そうそう、ウォルト・ディズニーの短編映画（1934年）だと、キリギリスがお礼にバイオリンを弾くシーンまであって、びっくりする。」

「水を差すようだけど、キリギリスも、あるいはセミもトンボも、食べ物があっても、冬を越しては生きられない気がする。でも、生物学的な話はここでは関係ない、か。」

「この話に限っては、どうしてアーズブカに取り上げたのか、トルストイの真意を疑ってしまうよ。備えが大切だなんて、言われなくたって誰でも分かること。たとえ教訓が書いてなくても、読めばすぐわかるし、あまりに押しつけがましい。」

「ふーん。そういう見方もできるかなあ（と周囲を見回す）。トルストイの真意もときとして議論していこうか。」